



Title	先住民の記録の分析(I) : 「インカ帝国史」をめぐって(1)
Author(s)	染田, 秀藤
Citation	Estudios Hispánicos. 1993, 17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93808
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

先住民の記録の分析(I)

—「インカ帝国史」をめぐる①—*

染 田 秀 藤

<はじめに>

16世紀に「インカ帝国史」に関して書かれたスペイン人の記録(クロニカ)は数多く、わが国でもそのいくつかが翻訳紹介されているが①、それらはいずれもヨーロッパ人の視点から描かれた「インカ帝国」の編年史であり、必ずしも客観的で実証的な作品であるとは言えない。事実、L. ハンケが指摘したとおり、16世紀後半、第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの時代に、スペイン人による征服とスペイン国王によるアンデス支配を正当化するための「インカ帝国史」が数篇、作成された②。そのような政治的意図のもとに記された「インカ帝国史」では、共通して「インカ皇帝」は「専制君主」もしくは「圧制者」として描かれている③。もちろん、シエサ・デ・レオン、ポロ・デ・オンデガルド、ホセ・デ・アコスタのように、できるかぎり正確な情報を収集して「インカ帝国」の文化や社会についての記録を著し、民族誌学的に高く評価されるクロニスタもいるが、それでも大部分は意識的、無意識的とを問わず、テキストへの介入を余儀なくされ、記述の対象となる歴史的事実や文化に対して自己の価値判断にもとづく解釈を下している。その意味からすれば、それらの記録は「インカ帝国史」を再現する史料としてよりも、クロニスタたちの、さらに言えば、当時のヨーロッパ人の歴史観や「他者認識の方法」を探るうえで貴重な資料と言える④。

しかし、それらの記録はヨーロッパにおいては久しく、もっぱら「インカ帝国」や「インカ文明」に関する優れた一次史料とみなされ、インカ・

イメージを形成するうえで大きな役割を果たした。そして、時の経過とともに、そのイメージは定着し、「インカ帝国」や「インカ文明」などの呼称が一般化し、ヨーロッパ人が作り上げた「インカ像」が“世界史”の中に組み込まれていった。しかし、ようやく今世紀後半、世界各地における民族主義の台頭と時を同じくして、そのような西欧中心的な世界史認識が絶対的価値を喪失し、新しい「人類史」構築の必要性に迫られるに及んで、アンデス研究に従事する考古学者、文化人類学者、歴史家などによる学際的な研究が行われるようになり、当然のことながら、既成の「インカ史」の書き直しが余儀なくされた。そして、その際、とりわけ重視されたのが先住民の遺した記録や、現在もアンデスの人々に語り継がれている伝説や神話、それに彼らが守りつづけている様々な伝統的な儀礼や習慣を調査・分析し、アンデス固有の価値観を解明する作業である⑤。

しかし、先住民の記録と言っても、自筆のものもあれば、口述筆記によるものもあり、作者が個人の記録もあれば、複数（集団）のものもある。また、使用される言語もカスティーリャ語（スペイン語）の場合もあれば、先住民語（チケウア語やアイマラ語など）とカスティーリャ語が入り混じっている記録もある。さらに、執筆の時期や動機、目的も様々で、中には明白な政治的意図をもって書かれた記録もあれば、植民地当局の命令で記されたものもある。したがって、先住民の記録を分析する際、それらの要素を考慮し、西欧的歴史概念から離れて、記録の中にアンデス的文化テキストを読み解くことが重要かつ不可欠な作業となる。

拙論の目的は既成の「インカ帝国史」とインディオ自身の語る歴史との間に見られるずれを解明し、その意味するところを分析することによってアンデス文化に固有の価値観を探り出すことである。そのために、一つの記録を題材にして、それと他の先住民の記録およびヨーロッパ人のクロニカを比較対照する方法を用いるが、本稿では、紙幅の関係上、その記録の一部を訳出するにとどめる。

（凡例）

◆記録の原題は *Relación de la Descendencia, Gobierno y Conquista de los Incas*（マドリード、国立図書館所蔵 Legajo J. No.133）で、底本にしたのはペルーのフワン・ホセ・ベガによる校閲版である（Ediciones de la Biblioteca Universitaria. Lima. 1974）。

◆作品は二部構成で、訳出するのは第一部の「インカ帝国史」のみ。作品は、コリャピニャ、スプノなど、パカリタンボ生まれでクスコ在住の歳老いた四名のキプカマヨ（キープと呼ばれた重要な意思伝達手段を解説する役人）が1542年にペルー総督バカ・デ・カストロの要請を受けて口述した報告書（ケチュア語）を、のちにカステイーリャ語のできるインディオやケチュア語のできるスペイン人（フワン・デ・ベタンソスなど）によりカステイーリャ語に訳され、編纂されたものである。したがって、この記録にはヨーロッパ的要素とアンデス的要素が混在していることに注意しなければならない。

◆人名、地名などのカナ表記はすべて原音主義を採用し、適宜〔 〕内に通称を示した。

◆（ ）内は訳者による注もしくは補いである。

『歴代インカの系譜と統治』

……かつてインディオたちは数多くのグァカ〔ワカ〕と偶像を所有し、それらを信じ、崇め、創造主とみなし、たいそう敬い、信仰していた。また、偶像には、それぞれインディオの呪術師がいて、彼らは神官の役割を果たしていた。と言うのも、彼らは偶像に生け贄を捧げ、様々な儀式や儀礼を執り行ったからである。偶像には、子羊（リヤマのこと）、子兎、ありとあらゆる食糧とコカが捧げられた。コカは生け贄の儀式や呪術など、偶像崇拜にとって何にもまして欠かすことのできない重要な材料であった。コカがなければ、何も始まらなかった。偶像に生け贄や供物を捧げるとき、コカが焚かれた。偶像はとても崇拝された。インガ・ユパンゲは別名、パチャクティ・インガと呼ばれた第九代のインガであるが、彼こそ、後述するように、少年や少女の生け贄を考え出した張本人である。

この王国のインディオたちが……無秩序な状態で暮らしていた頃、クスコから五レグワ（1レグワはほぼ5.5キロ）離れた所にあるカパリタンボ（原文のまま）からマンゴ・カパク・インガ〔マンコ・カパク・インカ〕が変装して現れた。先に述べたキプカマヨたち（この記録の報告者）は以下のような作り話を実にまことしやかに語った。つまり、初代インガであるマンゴ・カパクは太陽の御子であった、彼はある館の窓から現れ出た、そして、彼は窓の隙間もしくは壁と大岩の凹みからさしてくる太陽の光、つま

り、輝きの中から生まれた、と。そこには、彼らが偽って神殿と呼ぶ館があったのである。マンゴ・カパクは父である太陽の命令でそこを発ち、クスコの盆地を見下ろす山の頂上へ向かった。そのとき、彼は神官としてとても崇められていた二人の老人のうち、一人を選んで連れて行った。二人のうち、一人は彼の育ての親だった。同じく、マンゴ・カパクとその老人は人間の形をした石の偶像と10名ないし11名のインディオをその妻と一緒に連れて行った。インディオたちはまるでマンゴ・カパクの家族のようにみごとに変装して彼に従い、グァナカオレと呼ばれた石の偶像を先頭に掲げて進んだ。彼らが立ち止まった丘、つまり、山はその偶像に因んでグァナカオレと名付けられた。と言うのも、そこに偶像のために幕屋か礼拝所のようなものが建てられ、その祠に偶像がまつられたからである。インガたちは祭りの時期が来ると、グァナカオレに参詣し、生け贄を行った。そして、王国中のインディオたちもグァナカオレをインガの重要な“グァカ”，太陽の遣わしたものとして崇め、その山に詣でて生け贄や供物を捧げた。

バカ・デ・カストロの前に出頭した四人のキプカマヨのうち二人、すなわちカリャピニャとスプノはパカリタンボ生まれで、彼らは以下のような報告をした。彼らの祖父や父はインガに仕えるキプカマヨとして息子や孫に、人には語ってはならないと言い含めて、初代インガのマンゴ・カパクがパカリタンボを治めたクラカの子で、父親の名前は分からないと伝えた。それと言うのも、彼らも同じパカリタンボの出身で、マンゴ・カパクの出自を知っていたからである。マンゴ・インガはいまだ稚けない幼児の頃、もっぱら父親の手で育てられた。母親が死んでしまったからで、マンゴ・インガは彼女を知らなかった。そして、父親は彼に、おまえは自分の子ではなく、太陽の子だと、戯れに語っていた。父親が息子と戯れて愛称をつけることはよくあるが、彼の場合もそれと変わらなかった。すなわち、マンゴ・カパクは太陽の御子と呼ばれていたのである。そして父親が他界したとき、マンゴ・カパクは10歳か12歳そこそこの少年だったが、獣のような人々の間では太陽の御子と呼ばれつづけた。父親がそう名付けていたからである。父親の館にいた人々や家族の中に、人々から非常に崇められていた老人が二人いた。と言うのも、彼らはマンゴ・カパクの父親が所有していた偶像に仕える神官だったからである。そして、神官たちもその館にいた家族や人々と同じように、ごくふつうにいつも彼を太陽の御子と呼び、そ

う彼に語りかけた。それで、マンゴ・カパクはてっきり自分は太陽の御子だと信じこんだ。と言うのも、彼は母親を知らなかったし、父親が常日頃から自分のことを太陽の御子と語り、呼んでいるのを耳にしていたからである。そういうわけで、次のような作り話が生まれた。つまり、マンゴ・カパクは18歳か20歳の頃、野蛮な人々に、自分を太陽の御子だと信じこませたのである。そのために、先記の歳老いた神官たちは獣のような人々に、マンゴ・カパクが太陽の御子であることを伝えるのに懸命になり、マンゴ・カパク自身にもそう信じこませた。その結果、マンゴ・カパクは自分が太陽の御子であることを信じて疑わなかった。そして、偶像に仕えるそれらの神官たちが命令を下したことや、彼らが人々の信頼を得ていたことにより、若者マンゴ・カパクは太陽の御子となった。神官たちは彼を鼓舞しようと思ひ、占いによれば、マンゴ・カパクとその子孫は必ずこの土地の支配者になると告げた。神官たちの助けと配慮を得て、若者はその気になり、彼なりに最大限の努力を払った。

そのような嘘、偽りのもと、マンゴ・カパクは歳老いた神官と家族の者を伴い、グァカやグァナカウレと呼ばれる偶像を携えてパカリタンボを離れ、クスコ盆地を扼する高い山へ向かい、そこに留まった。その後、その山はグァナカウレという偶像の名で呼ばれた。と言うのも、キリスト教徒たちがこの王国に足を踏み入れるまで、その偶像がそこに、つまり、特別に作られた神殿のような館、すなわち、幕屋に莫大な財宝とともにまつられていたからである。その財宝をキリスト教徒たちは発見した。その後、マンゴ・カパクは連れていた家族の者たちとともに、自分のために一軒の小さな家をこしらえ、そこに住み着き、偶像はその幕屋にまつられた。マンゴ・カパクの家が建てられると、偶像に仕える二人の神官はクスコ盆地へ降りてゆき、多くの村に住む大勢のインディオたちの所へ赴き、その野蛮な人々に、太陽が地上を治める最大の支配者として人の姿をした自分の子どもを遣わされ、この世に生きとし生ける者はすべて彼に従い、彼を支配者として、太陽の御子として認めるよう、はっきり命じられたと知らせた。また、彼らは、自分たちは太陽とその補佐グァナカウレのしもべ、使者として、彼らの伝言をもってやって来たことと伝え、猶予することなくマンゴ・カパクを崇め、地上の最大の支配者として、また、太陽の御子として認めるよう訓諭を垂れ、もし刃向かって命令を守らなければ、太

陽は彼らのもとへ大いなる疫病をもたらし、その結果、一人残らず死に絶えてしまうだろうと告げた。と言うのも、彼らによれば、太陽は世界を滅ぼし、ノアの洪水のように、人類に大きな罰を下し、そして、地上に新しい人々を住まわせることを決めているからであった。そして、すぐにでも、各々、贈り物や捧げ物をもってマンゴ・カパクのもとへはせ参じ、彼を崇め、地上の最大の支配者として、また、太陽の御子として認めるように求めた。同じように、太陽であるプンチャオもそのしもべであり友人であるグァナカウレを派遣したが、それは人々が全員、彼を崇め、人命の守り手とみなし、また、この世において万事、順調にことが運び、地上に大いなる繁栄と安寧がもたらされるのを願ってのことであると語った。歳老いた如何様師が盆地へ下り、村々に住む住民たちのもとに留まっていた頃、マンゴ・カパクも使者たちに伝言を持たせてクスコ盆地の住民全員のもとへ派遣した。住民たちは（伝言を聞いて）周章狼狽し、脅え、大騒ぎして集まった。そして次の日、彼らは一人残らず、朝まだ早い頃に出発し、贈り物や捧げ物を携えて彼を崇めに行った。各々、財産やできるかぎりの物をもってはせ参じた。この話を捏造した二人の老人も彼らと連れだって出かけた。

マンゴ・カパクは、クスコ盆地に住む人々が自分を崇めに来ることになっていた日の朝、パカリタンボから持参した素晴らしい衣服を身にまとった。すなわち、銀色の二枚貝の下着を肌につけ、胸には黄金の皿のようなものを当て、頭にはカニポと呼ばれる大きな黄金の勲章（带状の王冠）、両腕には銀製の腕輪をはめた。頭と衣装には色とりどりの鳥の羽根をたくさんつけ、顔は朱色に塗りたくっていた。太陽が昇ると、マンゴ・カパクは、太陽の光が反射して、自分が光り輝いて見える方へ身体を向けた。ちょうどそのとき、盆地に住むインディオたちが彼の方に向かって歩を進めていた。そして、実に野蛮なその人々は、マンゴ・カパクの身につけていた黄金の皿などに反射し、彼自身から光が煌めくのを目の当たりにして、彼を太陽の御子だと本当に信じてしまった。そうして、彼らは歩きながら、マンゴ・カパクを神のように崇めた。彼は持参した偶像のグァナカウレを同じように立派な衣装や多くの金や銀製品、色とりどりの鳥の羽根で飾り立てていた。マンゴ・カパクはその偶像を小枝や枝で拵えた祠のような御輿に乗せて担がせていた。その如何様師（マンゴ・カパク）は自分のもとへやって

来たクラーカや有力者たちの名前をすでに知っていたので、彼らを名前で呼びはじめた。すると、インディオたちは動転した。そこで、彼はインディオたちに、「父なる太陽がおまえたちや地上の幸せと存続を願い、また、おまえたちに平和と安寧をもたらすために私を遣わした」と語り、「おまえたちのなすべきことはもっぱら私に従い、私の命ずることを実行することであり、もし逆らえば、父なる太陽が命じられたとおり、重罰を受けることになる」と説いた。それから、彼らに向かって、現在、サント・ドミンゴ修道院が建っている場所に父なる太陽のために館を一軒、その近くに自分のためにもう一軒、建設するようにと命じた。盆地に住むインディオたちは時を移さず、仕事に着手した。また同じように、彼はインディオたちに、太陽が世界の生きとし生けるものすべてを守り、治めるために、自らの子供を支配者として、また、かけがえのない指導者として（地上に）遣わされた経緯を全土に出来るだけ早く知らせ、広めるよう命じた。グアナカウレに仕える二人の歳老いた神官はすぐに近郊の村へ向かい、太陽の御子と偶像グアナカウレの到来を知らせた。そうして、10レグワも離れた土地に住む人々がマンゴ・カパクに従い、彼を支配者、太陽の御子と認めて、贈り物や捧げ物を携えてはせ参じるよう取り計らった。

マンゴ・カパクは煩わしい戦いや武器に訴えることなく、様々な策と工作を弄して自分を支配者、太陽の御子と認めさせ、その土地を支配したインガの最初の人物であり、その始祖であった。彼はクスコの周囲10レグワの土地を治める支配者であった。妻はママ・ウァコで、彼女との間に二人の息子をもうけた。長男で世嗣はチンチュロカ [シンチ・ロカ]・インガと呼ばれ、次男はトパ・アウカ・イリイといった。この次男の子孫はチマパナカスのアイリョ [アイユ] に属している。知っておくべきは、インガの時代、支配者の地位を継承したのが、そのいにしへの掟や習慣にしたがって、正妻の産んだ嫡男であったことである。そして、後述するように、正妻を迎えるにあたり、彼らは結婚式を催し、様々な儀式を行い、それを祝った。インガはそれぞれ、愛妾にした女性との間に数知れない子供をもうけたが、彼らの古くからの掟や習慣にしたがって、父親を継承したのは正妻との間に生まれた嫡子だけであった。もし嫡男がいなければ、その場合には、庶子なら誰でも、インガに指名されれば、継承することが認められた。（しかし）男子がいらない場合、女子が継承することは許されなかった。

初代のインガ、マンゴ・カパクの跡を継いだのはその息子のチンチェ・ロカである。彼は父親と同じ考えを抱き、父親ゆずりの手腕をもち、彼もまた太陽の御子になった。チンチェ・ロカは武器を振りかざし、戦いを行って征服や支配を開始した最初のインガである。彼はクスコの周囲30レグワにいたる土地を支配した。彼はアンダグアリヤス [アンダワイラス] 地方から先へは進めなかった。と言うのも、その地方には大勢の人々が暮らし、一人残らず、某支配者に従っていたので、首尾よく征服することができなかつたのである。コリャオ地方では、彼はビルカノタ峠を越えることができなかった。カナス人とカンチェス [カンチス] 人が行く手を阻んだからである。チンチェ・ロカはママ・コカを妻に娶り、彼女との間に二人の息子をもうけた。長子はリョケ・ユパンキ・インガという名前であった。次男はマンゴ・カパクと言われた。この次男の子孫に当たるのはラオラオ・パナカのアイリョに属する人々である。チンチェ・ロカは60歳を越えるまで統治した。

チンチェ・ロカの跡を継いだのは息子のリュケ・ユパンゲ・インガである。彼は版図を拡大しなかつた。と言うのも、その治世、彼が受け継いだ部下たちの反乱が相次ぎ、支配権を喪失するところだったからである。つまり、リュケ・ユパンゲは父祖から継承したものを維持するのに精一杯だったのである。妻はママ・カバで、彼女との間に三人の息子が生まれた。長男はマイタ・カパク・インガ、次男はアポ・コンデ・マイタ、そして、三男はアポ・タカという名前であった。次男および三男の子孫はチグアのアイリョに属している。リュケ・ユパンゲは50年以上も支配した。

リュケ・ユパンゲの後継者はマイタ・カパク・インガで、彼も版図をまったく拡大しなかつた。なぜなら、彼は、日をついで叛旗を翻す部下たちとの戦いに明け暮れていたからである。マイタ・カパク・インガはママ・タオカ・ライを妻に娶り、彼女との間に二人の息子をもうけた。長男で継承者となったのはカパク・ユパンゲ・インガで、次男はアポ・タルコ・グアマンと呼ばれた。次男の子孫に当たるのはウシュカマイタスのアイリョに属する人たちである。マイタ・カパク・インガは50年間、統治した。

マイタ・カパク・インガの跡を継いだのは息子のカパク・ユパンギで、彼はビルカスにいたる土地を征服し、ソラス人を支配し、また、コンデスヨス地方、パリナコチャおよびその近郊まで征服を進め、アイマラエス人

を支配した。彼らがカパク・ユパンギに服従したのは自発的な意思からではなく、彼を恐れてのことだった。コリャオでは、パウカルコチャにいたコリャ人が彼に従ったが、彼らはインガの勢力を恐れてあえて抵抗しなかったのである。カパク・ユパンギは全土の人々に太陽を心から崇めるよう指図し、命じた。そして、彼は切り出した石でクスコに太陽の館の建設をはじめた。マイタ・カパク・インガはママ・チュキ・イリュパイを妻とし、彼女との間に四人の息子が生まれた。長男で継承者になったのはインガ・ロカで、弟はアポ・カリヤ・ウンピリ、アポ・サカ・インガとチマ・チャビンであった。この弟たちの子孫はアポマイタスのアイリョに属している。カパク・ユパンギは60年以上、支配した。

カパク・ユパンギを継いだのはインガ・ロカである。彼は受け継いだ領土を支配し、維持したが、版図を広げはしなかった。インガ・ロカは80歳を越える高齢になるまで実に平和裡に土地を治め、父カパク・ユパンギが着手したように、石造の太陽の館を建設するよう命令した。また、彼は、太陽に身を捧げた女性であるママコナの館を各村に建てるよう命じ、さらに、広大なチャカラス（畑）を開拓し、あらゆる食料を栽培し、保管するよう指図したが、それは、戦争（の勃発）や飢饉の年に備えてのことでもあった。インガ・ロカはママ・ミカイを妻に迎え、彼女との間に四人の息子をもうけた。長男で継承者になったのはヤウアルウァカク [ヤワルワカク]・インガで、弟はマイタ・カパク・インガ、ユマン・タルシ、ビカキラオ・インガとクスコ・ウルコ・グァランガであった。弟たちの子孫はバカキラオのアイリョに属する人々である。彼は歴代のどのインガよりも献身的に太陽を崇めた。

インガ・ロカを継承したのはヤウアル・ウァカク・インガで、本名はマイタ・ユパンゲであった。彼がヤウアル・ウァカク（“血を流す男”の意味）・インガと呼ばれたのは、眼病を患っていたからである。彼は戦いが好きで、コンデスユス地方一帯を海岸部にいたるまで、また、チュクイト地方をデサグァデロ川あたりまで、さらに、オマスヨ方面ではグァンカネまでを支配下に置いた。彼はママ・チクキアを妻とし、彼女との間に六人の息子をもうけた。嫡男はピラコチャ・インガで、立派な男であった。弟はパウカル・ヤリイ、パウァク・ウァリュパ・マイタ、マルカ・ユト、ト

パ・インガ・パウカルとインガ・ロカであった。弟たちの血を引く子孫はアウカイリョ・パナカというアイリョに属している人々である。このインガの支配は40年余りつづいた。

ヤウアルウァカク・インガを継いだのはビラコチャ・インガである。彼はパリアまで征服を進め、パカヘスとカランガスの人々を全員、従えた。チャルカスの一部の人々やグァリナ [ワリナ] にいたるウマスヨ [オマスヨ] の人たちも平和裡に彼に従った。また、ビラコチャ・インガは山を下って現在のグァヌコ [ワヌコ] 管区にあたる土地一帯を、また、キトへ通じる山岳地帯を通してトゥルヒーリョあたりの土地の一部、征服した。

インガの語り部であるキプカマヨたちの報告によれば、インガたちに征服されるずっと以前、現在トゥルヒーリョ市が建設されている海岸部の平野に、はるか昔、チモ [チムー] と呼ばれる国があり、そこに、チモ・カパクと呼ばれる偉大な支配者の館があった。彼はカハスヤラ・ナスカからピウラのはるか北にいたる海岸部の平野を治める支配者であった。もっとも中には、チモの支配はプエルト・ビエホまで及び、その人々は彼にエメラルド、黄金や銀のチャキラ（数珠のようなもの）を納めていたと証言するものもある。このチモ・カパクは海岸地帯を治める最大の支配者で、山岳部にはいっさい関わらなかつた。海岸部に住む人々は例外なく、彼を土着の、そして、インガよりも20代以上も古くからつづく（王朝の）支配者として認め、大いなる愛情と尊敬の気持ちで彼に仕え、それぞれの土地でできるものを納めていた。と言うのも、彼らが実に古くからその土地を治めた偉大な支配者であり、国王であったことは、彼らの墳墓やグァカで金、銀、莫大な量のエメラルドや素晴らしいトルコ石など、数え切れないほどの財宝や富が発見されたことから明白である。そういうわけで、そのチモ・カパクをはじめ、彼の祖先や子孫の時代に、戦いや征服が行われたとか、インガの治世に起きたように、部下たちの反乱が勃発したことを示すものはなく、むしろ、彼らは実に静穏かつ平和に数知れない歳月、君臨したのである。海岸部の平野に住む人々はユンガスと呼ばれ、非常に体が弱かつた。海岸部の大半を治め、支配したのはタリャポナスと呼ばれる女性たちで、別の地方ではカプリャナスと呼ばれていた。人々から大いに敬われたクラーカもいたが、彼女たちはとても尊敬されていた。クラーカたちはチャカラで農作業に従事したり、その他、求められる別の仕事に

従事した。と言うのも、それ以外の仕事はカプリヤナス、もしくは、タリヤポナスに任されたからである。海岸部の平野ではどこでも、彼らは掟としてその習慣を守っていた。そして、カプリヤナスはクラーカの妻であり、女支配者であった。

ビラコチャ・インガという第八代インガは山を下り、王国と支配権を拡大し、高地や山岳地帯を支配下に置き、さらに、現在、トゥルヒーリョ市が位置するチモの近郊まで軍を進めた。彼は平野を支配するチモ・カパクのもとへ数名の使者を送り、彼らを通じてチモに、伝言を知ったのちは、自分に服従を誓い、自分を彼が支配するすべての地方の君主として認め、贈り物や捧げ物を持ってくるようにと伝えた。さらに、もし逆らえば、父なる太陽が命じたように、征服に向かい、容赦のない戦いを仕掛け、皆殺しにすると伝えた。ビラコチャ・インガの使者たちに会って、チモ・カパクは非常に狼狽し、脅えた。太陽の御子として、また太陽の加護のもとに、ビラコチャ・インガが残忍な戦いを行いながら、全土を征服し、支配しているという恐ろしい噂や風聞を知っていたからである。戦いなど一度もなかったのも、戦いに慣れておらず、また、一度も実戦経験のなかったチモ・カパクは狼狽し、ビラコチャ・インガを支配者と認め、彼に服従を誓い、贈り物や捧げ物を持たせて使者を彼のもとへ派遣した。また、チモ・カパクは彼のもとへ20名の乙女とエメラルドやトルコ石などの貴石でこしらえた首飾り、二枚貝のチャキラや、その土地の衣服や品物を送り届け、太陽の御子の臣下になった。ビラコチャ・インガはチモ・カパクの謙虚な態度や伝言を知って、彼から支配権を奪わず、むしろそれを庇護してやった。ただし、ビラコチャ・インガは自分がその土地を領有し、支配していることを示すため、すぐに司政官と守備隊を派遣した。彼らはミティマエスで、インガに対してなすべき義務や納めるべき物についてチモ・カパクに伝えるよう命令を受けていた。同時に、(海岸部の)その地方からインディオたちも連れ出され、ミティマエスとして別の地方へ移された。それは、インガが常に行っていたことである。ビラコチャ・インガはチモ・カパクに慈悲を垂れ、数多くの品物や大勢の女性を贈り物として送り、司政官たちには、彼を不快にさせてはならず、全員、誠心誠意をつくして仕えるよう命じ、自分がチモ・カパクに望んでいるのは、彼が人々から全土を治める最大の支配者として認められないことだけであると伝えた。こうして、

手厚い扱いを受けて、チモ・カパクは満足し、安心した。もっともその後のインガは彼の支配権を次第に削減し、ついには、ピラコチャ・インガの息子で継承者であるインガ・ユパンゲが彼を背信の疑いありと誹謗し、支配権をことごとく奪い去ってしまった。それゆえ、現在、彼らのことを思い出させるものはない。すなわち、確かなことであるが、トパ・インガが治めて以来、彼らのことを偲ばせるものはなかったし、現在もそれに変わりがないのである。と言うのも、生き残った一部の人々は分けられ、ミティマエスとして別の地方へ移されたからである。

このピラコチャ・インガの業績や征服についてさらにつづけると、彼は歴代のどのインガよりも優れた支配者であった。彼は戦いを好み、立派な戦士でもあった。ピラコチャ・インガは実に数多くの事柄を命じ、指図したが、それらは今でもなお、守られている。彼が最初に命じたのは、他のいかなる言葉よりも明晰で平易であるという理由から、キチュア [ケチュア] 語を王国中、つまりクスコから海岸部にいたる地方で話される共通の言葉にすることであった。と言うのも、ポルトガル語あるいはガリシア語がカステーリャ語に類似するように、すべての言葉がキチュア語に似通っていたからである。また、彼は、王国中のクラーカの息子たちにクスコへ集まるよう命じたが、それはその共通の言葉を学ばせるためであると同時に、クラーカや司政官になるのに必要な事柄を学び、理解させ、支配や統治の術を身につけさせるためでもあった。そして、カナスとカンチェスから南はチャルカスの果てまで、また、コンデスヨス全土に住む人々にはアイマラ語を共通の言葉と定めた。アイマラ語が彼らの間でよく使われている言葉であり、平易だったからである。また同じく、ピラコチャ・インガは、境遇、身分の如何を問わず、王国中のインディオは例外なく、男も女も、村ごと土地ごとに、目印や標章のある衣服をまとい、帽子にも目印か標識をつけるように命じた。それらの目印などは互いにきわめて異なるものでなければならなかった。それは、衣装の目印や標章で、それぞれの出身地が分かるようにするために、もしよその土地の標章を衣服につけた場合、死罪と定められた。これは必ず実行するよう厳しく命じられた。そして、今日にいたるまで、その命令は守られ、実に正確に実行されている。また、ピラコチャ・インガは、いかなるインディオもインガが定めたクラーカもしくは司政官を通じてしか、妻を娶ってはならないと命じた。それと言うのも、どのイ

ンディオも、妻とチャカラスを与えられるのにふさわしい働きをするようにとの配慮からであった。さらに、彼は王道に、彼らがチョタスと呼んでいた長さの単位であるバラ（カステイーリヤの長さの単位）ごとに、つまり数レグワごとにトポ（宿駅を意味するタンボのことか？）を配置するように命じた。同じく、ビラコチャ・インガは王道にはどこにも、チャスケス（“飛脚”・チャスキス）を配属するように、つまり各トポに4人のチャスケスを常駐させるよう命令したが、それはチャスケスがインガからの命令や食料を携えて、できるだけ早く領土を駆けめぐることができるようにするためであった。また、彼は、クラーカや有力者は広場で家族や臣下たちと一緒に食事をするように命じたが、それは旅人、貧しい人や身体に障害があって働けない人たちが食料にありつけるようにするためであった。さらにまた、彼は、各々の村に、収穫を保管するため、住民が共有する広大なチャカラスを開拓するよう指図した。また、新しく植民するために連行されたミティマエスのために、その地方の住民は家を建て、二年間、チャカラスの仕事を手助けするよう命じた。さらに、彼らは二年間にわたり、ミティマエスに、インガの倉庫から援助の形で食料を分け与えるよう命じられた。このビラコチャ・インガは国のために尽くした偉大な人物で、ここでは冗慢になるのを避けるため、逐一述べるのを差し控えるが、実に数多くの事柄を命じた。もっともこのインガが行った多くの業績が彼の後継者や子孫に帰されているが、それは事実ではない。

キリスト教徒がこの王国に進入した頃、キリスト教徒の勇気、権威、自負心を知って、彼らを“ビラコチャス”と呼ぶ以外に、彼らにつけるべき崇高かつ高尚な名前が見当たらなかった。と言うのも、ビラコチャスという名前はもっぱら偉大なる勇気という意味で、したがって、それは彼らを君主と呼ぶのと変わらなかった。一部の人は、彼らが海から現れたからといって“海の泡”という意味で“ビラコチャス”と名付けたが、そのような意味ではない。このビラコチャ・インガの後にも先にも、彼ほど勇敢で勢力を誇ったインガはいない。と言うのも、彼が実に強大な権勢を誇り、版図を拡大し、人々を服従させたおかげで、彼の息子たちは大した苦勞もせず、領土を広げていったからである。ビラコチャ・インガはママ・ロンド・カヤンを妻とし、彼女との間に三人の息子をもうけた。嫡男はインガ・ユパンゲ、弟はインガ・ウルクンとインガ・マイタであった。弟たち

の子孫はスクスパナカのアイリヨに属する人々である。ビラコチャ・インガの治世は70年余りつづいた。〔未完〕

*本稿は平成4年度の文部省科学研究費・一般研究C(“大航海時代のスペイン語文書に見られる他者認識方法に関する考察”)の助成を得て作成したものである。

[注]

①シエサ・デ・レオン『インカ帝国史』(訳・解説=増田義郎 岩波書店 大航海時代叢書 第二期⑮ 1979年):ホセ・デ・アコスタ『新大陸自然文化史』(訳・解説=増田義郎 岩波書店 大航海時代叢書 第一期Ⅳ 1966年)

②Hanke, Lewis: *The Spanish Struggle for Justice in the Conquest of America*. Philadelphia. 1949. pp. 162-172. (邦訳『スペインの新大陸征服』染田秀藤訳 平凡社 1979年 261-274頁)

③例えば、サルミエント・デ・ガンボアはその『インカ史』*Historia Indica* のフェリペ二世あての献辞の中で次のように記している。「……有力なクラーカたちは最大かつ最も残忍で、有害な圧制者であるインカ、トパ・インガ・ユパンキによって任命されたものにすぎません。また、一般に、クラーカは、過去、現在を問わず、インガと呼ばれる、別の甚だしい暴力的な圧制者によって任命された、これまた途方もない圧制者なのです……」

④このことはインカのみならず、メシーカ(アステカ)やマヤなど、当時「インディアス」と呼ばれた「新大陸」に住む先住民の文化を論じたヨーロッパ人のクロニカに共通して言える。ベルナルディーノ・デ・サアグンの『ヌエバ・エスパーニャ綜覧』はその好例である(参照サアグン『神々との戦いⅠ』訳=篠原愛人・染田秀藤/解説・染田秀藤 岩波書店 アンソロジー「新世界の挑戦」9. 1992年)

⑤以下に挙げるのはそのような視点に基づいて著された研究の一部である。

Patterson, Thomas C.: *The Inca Empire. The Formation and Disintegration of a Pre-Capitalist State*. London. 1991

Sabine MacCormack: *Religion in the Andes. Vision and Imagination in Early Colonial Peru*. Princeton. 1991.

Dover, Robert V.H./Seibold, Katharine E./Macdowell, John H. (ed.): *Andean Cosmologies through Time. Persistence and Emergence*. Indianapolis. 1992.

Silberblatt, Irene: *Moon, sun, and witches. Gender Ideologies and Class in Inca and Colonial Peru*. Princeton. 1987.

Pease G.Y., Franklin: *Curacas, Reciprocidad y Riqueza*. Lima. 1992.